

プロジェクト法と幼稚園の作業

東京高等師範學校教授 乙 竹 岩 造

近年米國の教育界に盛んに唱導され、且つ實行されて、我が邦にも傳へられ、又倣はれて來たものゝ一は、プロジェクト法である。プロジェクト法は、或は計畫法、或は構想法など様々に譯されてゐるが、とにかく、教材即ち題材を、一つの計畫又は構案の形で取扱はせようといふものである。社會の實際生活に於て、事業を劃策し經營することを企業と呼ぶが、丁度一つの企業のやうに、計畫構案の姿で學習させようといふのが、その趣意である。その論據はプラグマティズムといふよりは今一つ奥のビヘビオリズムに發してゐるので、これ等の點に入つて議論をすれば、すべき點も無いではないが、とにかく、一方には、本能や衝動や慾望や理性やを内容とする子供の世界を篤と見届け、他方には道德や知識や藝術を内容とする實際の世界を確乎と眺め、そしてその兩方の間に、生きた關係を、覗ひ外づさず付けやうとするのが、この考の言はゞ山こもいふべき所であつて、この點に於ては、確かに一つの進んだ面白い着眼であると言はねばならない。

幼稚園は保育の場所であつて、規則立つた教授を施し學習をさせる所では決して無い。そこに行はれる作業の如きも、學校に行はれる作業とは違つてゐて、元來遊戲的の作業でなければならぬ。一體遊戲と作業とはどう違ふか。これは言ふまでもなく、遊戲はそのものゝ中に目的を有つてゐるものであるし、作業は或目的の爲に努力する活動である。即ち、遊戲の爲に遊戲をするのが、遊戲の遊戲たる所以であるし、或る目的を覗ひ外づさず作業するのが、作業の作業たる所以であるから、この點に於ては、遊戲と作業とは明らかなじめを有つてゐる、丁度と朱と紫とは確かに違ふやうなもので

ある。然らば遊戯と作業とは、何等のゆかりも無いまるで違つた世界であるかといふと、必ずしもさうでは無い。のみならず却つて、作業は遊戯から進んで来るものであつて、遊戯は實に作業の苗床であり、基礎である。恰かも紫の中には朱を含んでゐるのと同じである。殊に子供にあつては、この遊戯から作業への移り行きが、極めて大事なことであり、保育上に於てはこの移り行きの點こそ慎重な、そして巧妙な考慮を加へられなければならない問題である。何となれば、幼稚園時代の幼兒は、方にこの稚し移りの時期に生きてゐるものであるから。

乃ち、幼稚園の作業は、作業といつても寧ろ遊戯的の作業であらねばならない。けれども、唯だ手当たり放題に子供を活動させようとしても、させられるものでは無く、又子供も活動するものでは無いから、どうしてもそこに、何等かの材料を供給し、對象を與へなければならぬ。即ち或る纏まつた形に於ての作業の必要が、茲に生ずる。然かし纏まつた形に於ての作業も、唯だ材料を供給し、對象を與へるといふだけでは、動もするに、斑切型になつて興味を失つてしまつたり、單調な模倣的の反復に馳せ行き詰まつてしまつたりするものが、多くの場合殆んき避くべからざる成行である。この點に就て、この計畫構案の考を取り入れるといふことが、確かに一つの面白い着眼ではあるまいかと考へる。即ち遊戯にせよ、作業にせよ、これを演じこれを行ふ子供のその態度の上に、自らこれを計畫し、自らこれを構案し、自ら工夫し自ら處理し、自ら解決を遂げては更らに又新しく自ら計畫するといふことを、十分に涵養することが、一つのよい着眼ではあるまいか。そしてそれは、幼稚園には至極ふさはしいことではあるまいかと考へられる。

この考を取り入れることは、種々の點に於て幼稚園の生活に一段の活氣を帶ばしめるであらう。先づ第一に、子供が作業に對して自我を動かせる餘地が非常に多くなる。といふのは、工夫を凝らし計畫を立てるのであるから、自我を擧げてこれに没頭するからである。第二には、子供の作業に對する持續性を伸長する。といふのは、自然と斷片的ではなくして繼續的に、無論時を隔てても亦た繼續的にそれに従事することになるからである。第三には、子供の作業に對する興味を

一層大ならしめる。こいふのは、この方法では、その手續と範囲が多種多様であつて、言はゞ、無限にも展開せられるであらうから、例へば子供の興味の湧き出る泉が廣くなつたやうなもので、恐らく混々として流れて盡きぬであらう。然し、最も大事なことは、この方法によつて、かのそれ自身を目的とする所の遊戯の本質を、それから目的を覗ひ外つさず追求する所の作業の姿態とが、この態度の中に於ては、知らず識らずの間に、おのづから混和せられ、おのづから融合せられて、そして所謂遊戯から作業へのその大事な移り行きを、茲に完うさせる基礎を築くといふの一點である。

プロジェクト法は、學習を導いて有効ならしめる爲に案出された一つの方法であつて、保育の爲に考へられたもので無いのは言ふまでも無い。又幼稚園が、規則立つた學習の場所でないことも明らかである。唯だ、その作業の方面に於て、この法の趣旨を取ることは有益なことであらうと思はれる所から、茲にこれを一言したのである。

バツド・ボーイ

十番目の劇のとき不幸なことが持上つて、僕の俳優の生涯が、これでおしまひになりそうだった。それは僕達は其時瑞西の英雄ウイリヤム・テルの劇をやつてゐたのである。勿論僕がテルになつてゐる。實はフレッドが、そのこの役に當りたがつてゐたのだが、僕がそれをさせなかつたもんだから、やつこさん、おこつて、たつた一つの弓と矢を持つて、仲間からのけてしまつた。仕方なく僕は鯨鬚の片で石弓を拵らへたが、それでさもなくフレッドもさもなく事足りた。

オーストラリヤの暴君ジェスラーがテルに嚴命して、テルの息子の頃においた林檎を射落させる。い、所だ。ビーバーは子役と女形をみんな引うけてゐたが、今度はテルの息子になつた。間違の用意にホール紙をビーバーの上額にあてて、

ハンカチで結んだ。そして用ゐる矢先もフランネルの小片でくるんでおいた。僕は上手な射手である。そして大きなりんこが、ほんの六尺の距離に、僕の方を向いて、赤い頬べたを美しくすめた。僕は可愛そうな小ちやいビーバーを見た。ビーバーは、ためらはず、僕にこの偉業を果させるために神妙に待ちもつてゐるのであつた。僕は集つた観客が息を凝して静り返つてゐるのを機に石弓をさり上げた。……観客はケチイばあやをのけて男の兒が七人、女の兒が三人であら、ケチイばあやは、縫針が入場料の代りなしに事はないさいつて激論したのであつた。……繰返していふが、僕は石矢をさり上げた。……鞭繩の弦が手を、れた。だが、あはれ、矢は林檎に當らないで、ビーバーのあいた口の中へ眞當に飛込んでしまつた。それはビーバーがたまゝ矢咄をしやうとして、そして僕の的を外したのである。